

著者：

原則プロジェクト 編

題名：

人類最大の発見は「原則」である！

まえがき：

2003年2月9日、言わずと知れたインターネットの掲示板である2ちゃんねるに『人生最大の発見』と名付けたスレッドを立て、「原則」の存在を説き始めたのが私である。

その趣旨からスレッドは『原則スレ』と呼ばれているが、次第に「原則」に興味のある人達が集まるようになってきた。今でも存在し続けているスレッドには、これまでにおよそ三万件ほどの投稿が寄せられている。上記のキーワードで検索してみれば、すぐに過去のスレッドやホームページがヒットするようにまでなっている。哲学板に立てていたスレッドであるが、いつの間にかに哲学板の看板スレッドとして住民達からは認知されていた。

世間的なイメージは良くないが、草の根的なコミュニティであることから2ちゃんねるを、中でも哲学板を選んでスレッドを立てることにしたが、結果としてその選択は間違っていなかったようである。スレッドを立ててから半年ほど経過したところで、私の意図を完全に掴むことのできた人間が現れたのである。

私が見い出したものは単純な真実である。同一の真実を他の人間とも共有できるのだろうか、それを確かめるために実験的な意味合いを含めてスレッドを立てていたのである。結果として実験は大成功であった。『人生最大の発見は「原則」である！』という趣旨のメッセージが彼から私に伝えられたのだ。私が発見したものは間違いのない真実であり、その真実を他の人間とも共有することに成功したのである。

ところで今回の発見について、個人にとっては『人生最大の発見』に値するものであるが、人類にとっては『人類最大の発見』に値するものになっていくと考えられる。スレッドを立ててから8年ほど経っている今では、「原則」の趣旨を理解する者は着実に増えているが、彼らと話し合った結論として、本書の題名を『人類最大の発見は「原則」である！』に決定したのである。

本書の目的は大きく二つある。一つは「原則」の存在を読者に伝えること。そしてもう一つは、我々は原則プロジェクトなるものを開始していくという趣旨を伝えることである。つまり、本書は原則プロジェクトの名刺代わりになるものとして作られたということである。

また、広く普及を促すことを目的としているため、本書を電子書籍化したものについては、ネットにて広く無償で配布していくことを予定している。もちろんそれは『人類最大の発見』を一人でも多くの人達と、最終的には世界中の全ての人々と共有していきたいと考えているからである。我々が「原則」と呼んでいるものの正体について、読者によってその謎が解き明かされることを期待していきたい。

2010年12月 原則プロジェクトの提唱者

2ちゃんねる哲学板 人生最大の発見スレの1

目次：

まえがき

## 第一章 原則プロジェクトの始動

- ・「原則」とは？
- ・「原則」は実生活の中で利用できるもの
- ・未来の世界では、人類は「原則」を共有している
- ・本書の目的
- ・本書の内容
- ・これまでの経緯
- ・今後の展望
- ・個人的な思惑

## 第二章 人類史における重大な事実

- ・「原則」は再発見されたという事実
- ・老子は「道」の存在を提唱していたという事実

### 第三章 現代社会に根付いている「原理原則」

- ・「原則」と同義の概念を提唱している人物
- ・「原理原則」に則った考え方
- ・経営には「原理原則」がある
- ・すでに世界中で普及し始めている「原則」
- ・「原則」による考え方は自然と身に付いていく

### 第四章 人生最大の発見は「原則」を用いた価値最大化の手法である！

- ・価値を最大化するという考え方
- ・価値最大化の原理を見いだす
- ・結論

### 第五章 ネット上で公開している原稿について

- ・本書とは別にまとめていた原稿の存在
- ・反響が大きかった内容について
- ・原稿を読んでいただいた方達から受け取った感想の数々

あとがき

付録2（自分の書き込みから）

付録1（トップページの書き込みの紹介）

本文：

### 第一章 原則プロジェクトの始動

- ・「原則」とは？

本書を手にとって頂いた方であれば、『「原則」とは何なのだろう？』といった疑問を持ったものと思う。実はこれについてまとめた原稿が別があり、インターネット上で公開しているのだが、文字数にしておよそ 30 万字、原稿用紙にして 700 枚程度の分量になってい

る。これをそのまま書籍化すると分厚い本となり、読者が限られてしまうことを懸念したため、まずは簡潔に要点をまとめ直したものとして本書を出版することにしたのである。「原則」への入り口として、本書は最適なものになると思われる。本書を読んで興味が湧いてくるようであれば、ホームページ (<http://www.gensoku.net/>) までアクセスして頂ければ幸いである。

ところで「原則」とは何か、定義については本書の著者紹介の中で示し、結論については第五章でまとめている通りであるが、簡単に言えば、「原則」とは『世界の原理』、もしくは『世界の根本法則』といった非常にシンプルな概念のものである。言うなれば、この世界を動かしている大本とも言うべき存在に名付けた呼び名が「原則」ということである。

要するに、この世界は「原則」によって作られ、動かされているということである。我々は「原則」が世界に対してどのような影響を与えている存在なのかを解明することができ、さらにはその「原則」を見だし利用することで、人間にとって大きなメリットが得られることを発見したのである。

人間という生き物は体が成長していくだけでなく、脳みその中身も大きく成長していく生き物である。精神的に成長していくのはもちろんのこと、様々な経験を積んだり、ノウハウを蓄積していくことで、優れた思考や判断ができるようになっていく生き物である。人間ほど高度な精神活動を行うことのできる動物は他に存在しない。

実のところ、人間は世の中に対する見識を広げ、十分な経験を積んでいくことで、あらゆる物事に対する考え方を「原則」によって統一的にまとめ上げていくことができることを発見したのである。つまり、あらゆる世界は「原則」に従った同一のルールによって支配されていたのである。

我々人間は、視野を広げ、古今東西あらゆる世界を見ていくことで、時代や分野を超えて「原則」が世界に与える影響を普遍の真理として見抜くことができるようになっていくのであり、それによって理に適った理想的な物事の進め方を自ずと身につけていくことができるのである。

・「原則」は実生活の中で利用できるもの

前節を読んで、『それは当たり前のことだろう』と思った方もいるかもしれない。『人間は経験を積んでいくことで賢くなっていく生き物である』、確かにそれは当たり前のことである。しかし、我々が発見した事実はそういうことではない。

我々が発見したのは、『人間の賢さには理論的な限界があった』という事実を突き止めたということなのである。物事の仕組みを支配している根本原理である「原則」の存在があ

るために、その「原則」に則って物事を進めて行くことが最善であり、それを超える方法は存在し得ないのである。つまり、人間は「原則」に従って物事を進めていくことで、考え得る最高の状態である理想に限りなく近づいていけるという事実を発見したのである。未だ「原則」の存在を見いだせていないのであれば、それは成長の余地が残されているということである。

もう一度その趣旨を繰り返すが、全宇宙を支配している因果の大本である「原則」を知り尽くし、それを物事の営みに応用できる者こそが最高の知恵者であったということである。我々は、この「原則」を実生活の中で、そして如何なる場面においても実際に活用していけることを発見したのである。「原則」に則することで初めて最高の成果を生み出すことが可能となるのであり、何者も「原則」を超える成果を生み出すことは原理的に不可能なのである。

そして、この事実は「原則」の存在が未だ常識になっていない現在の人類にとっては朗報になるものと思われる。なぜなら、未だ人類は「原則」を発見し、利用し尽くすという限界点には達していないからであり、人類にとって、まだ成長の余地が十分に残されているからである。今後「原則」が人類に広く普及・浸透していくことで、人間社会は大きく変わっていくものと考えられる。

ところで、勘違いしないで頂きたいことは、現段階で「原則」の存在をすでに発見し、利用しようと試みている我々は優れている存在だと主張しているのではない。我々は一般の人間であるが、人類の中でも初めに「原則」の存在に気がついてしまっただけである。

これは例えであるが、計算機を手に行している人間は、それを手にしていない人間よりも早く、そして正確に計算結果を出すことができる。しかし、それは計算機を持っていないために早く計算結果を出せない人間が劣っているということではない。単に計算機というツールを持っているかどうかという話にすぎないのである。

我々は「原則」を利用することで有利に物事を進めることができるという、普遍的かつ理想的な物事の方法論を見つけてしまったにすぎないのである。おそらく未来の世界では、「原則」は人類にとって常識のものとなり、それを利用している人間が一般的になっているのだろうと予想されるのである。

「原則」を発見した人間からすると、なぜ「原則」は今まで知られてこなかったのかと疑問に思うほど当たり前のものとなっているのである。

・未来の世界では、人類は「原則」を共有している

「原則」を一部の人間達だけのものにするのではなく、人類全体で「原則」を共有することができれば、これまでの人類史上では未だかつて実現し得なかった理想の人間社会を

世界全体で実現できるものと考えられる。

そもそも、世界というのは理想に向かって進むようにできているのであり、そのような大きな世の中の流れを促している本体が「原則」の存在であるとも言えるのである。我々が「原則」の普及を促していることも、「原則」の生み出す流れに従っていることだと言える。

あたかもこの世界は、「原則」という意思をもった存在があるかのような作りになっていたのであり、どうあがいても世界には「原則」による流れが自然と形成されてきてしまうのである。

そのような世界の有り様を理解した我々は、「原則」によって作られてくる性質を指して『原則的』という言葉を使い、世界が「原則」によって変化していく様子を『原則化』という言葉を使って表している。つまり、『この世界は「原則」によって原則化され続けている』と表現することが可能となる。世界は、より「原則」に忠実な姿になろうとする性質を持っていると言えるのである。

これから「原則」は人類に広く普及していくものと考えられるが、我々は将来的に『人類の至宝』となるであろう「原則」の存在を人類に先駆けて発見してしまったということである。

もう少し正確に言えば、「原則」なる概念の存在をおいて考えることで、非常に都合が良く物事を考えていくことができるという、普遍的な物事の方法論を発見したと言うことになる。「原則」を利用することで導かれた考え方によって、実際に見事な成果を生み出すことができるのである。

また、人間社会が「原則」によって動き始めていくことで、本来そうあるべき理想の世界が作られていくという理論すら導き出せる。この地球上に「原則」が広く普及し、次第に「原則」によって人類が動き始めていくのも時間の問題であると思われるが、それが人間社会における自己組織化の始まりであり、「原則」によって促される人間社会の原則化であると言える。

最終的には、ミクロで見れば人類の一人一人は自由に行動しつつも、マクロで見れば人類全体は「原則」に則して動いていると言える社会になるものと考えられる。また、それによって人類一人一人の幸福度の総計は最大化される。すでに人間社会の原則化は始まっているが、今後は加速してそのような世界に向かって時代は進んでいくものと思われる。

ちなみに、人間社会の原則化とは、人類の一人一人が真に賢くなり、賢い人類によって的確に人間社会が運用されていくことで始まっていくものである。世の中は誰か一人の人間によって作られているのではなく、全ての人類の一人一人によって作られているのである。今後は私たち一般人の一人一人が主役であることを意識する機会が多くなっていくことであろう。

## ・本書の目的

まえがきに記したように、本書が果たすべき目的は二つある。

目的の一つ目は、『我々は「原則」なる存在を発見した』という趣旨を読者に伝えることである。

目的の二つ目は、『我々は原則プロジェクトなるものを開始していく』という趣旨を読者に伝えることである。

我々は次第にこの「原則」の存在を人類に広く伝えていきたいと考えているところであるが、まずはその存在を発見したという趣旨を示すため、形あるものとして本を出版しようと考えたのである。そして、今ここに「原則」の存在を主張する本が出版され、無事に読者の手に渡って現在読まれるに至っている。読者が「原則」と名付けられた『世界の根本法則』に興味を持つかどうかは別にして、その概念の存在については伝えることができただろう。本書を手にして頂いているこの時点で、すでに一つ目の目的は達成されているということである。

本書を読み、「原則」に興味湧いてくるようであれば、ホームページで公開している原稿や参考文献などを読み進めていくことで、最終的に「原則」に対する自分なりの答えが得られることだろう。自分の人生の中において、『「原則」とはこういうことを指しているんだな』と納得ができるようになるということである。

「原則」を知った各々の人間は、「原則」に対してその発見を目指すのか、それとも「原則」を気にせず自らの役割を全うしようとするのか、その行動の選択は自由である。各々の人間が自らの意志によって主体的に行動を選択していくことにより、自ずと世界全体は本来あるべき姿へと導かれていく。それが「原則」によって生み出される人類の新しい動きであり、「原則」の普及とともに、人間社会を動かす大きな原動力になっていくものと思われる。

そして本書の二つ目の目的が、『我々は原則プロジェクトなるものを開始していく』という趣旨を読者に伝えることである。

原則プロジェクトの最も根本的な目的は、日本国内に限らず、世界中の全人類に「原則」の存在を伝えていくことであり、その存在を全人類で共有し、世界の常識になるよう促していくことである。まさにこの目的を達成させるために原則プロジェクトは生み出されたのである。

一人、そしてまた一人と伝えていくことは容易だが、数十億人もの数の全人類に一人残

らず伝えていくことを考えると、個人レベルでの取り組みとして実現させていくことは不可能に近い。そのため、プロジェクトとして組織的に取り組んでいくことを考え始めたのである。

我々はその目的から世界的認知度 **100%**を目指すため、その知名度という最大の武器を活かし、「原則」の存在を提唱するだけでなく、世界に向けて有益な情報を発信したり、世界の平和と発展に力を尽くしていこうと考えるようになった。もちろん、それもまた「原則」によって導かれた方針である。

このように、原則プロジェクトは名実ともに世界最大のプロジェクトとして人間社会の中で大きな役割を担うことを目的に提唱されたのである。これから原則プロジェクトは、「原則」という方針に沿って様々な事業を展開していく予定である。もっとも、その最大の役割は、人類が方針とするべき「原則」の存在を人類の代表として大きく掲げていくことである。

原則プロジェクトを正式に提唱したのは **2010年4月5日** であり、今はまだ始まったばかりである。現時点では、『何やらよく分からないが、原則プロジェクトなるものがこれから始まっていくんだな』という認識でいて頂ければ幸いである。

ちなみに、原則プロジェクトは一部の人間達によるプロジェクトではなく、最終的には、『人類の人類による人類のためのプロジェクト』になることを目指して進められているプロジェクトである。本書の出版がプロジェクトとしては最初の活動になるが、今後の進捗状況についてはホームページ等で報告していくつもりである。

## ・本書の内容

本書の二つの目的を伝えた今、原則プロジェクトとしての本書の目的は、この時点においてすでに達成されている。それでは残りのページで何を記すのかと言えば、読者に「原則」の存在を納得して頂くための情報を提示していきたいと考えている。

第二章と第三章では、「原則」と同義の内容として、すでに世の中で取り上げられている例についてを紹介していきたい。例については、これまでに2ちゃんねるやホームページで紹介していたものから選んでいく。「原則」がどういうことを指しているのか、非常に示唆に富んでいる内容となっている。

第四章では、これまでに私が「原則」についてまとめた原稿の中から抜粋したものと、先に原稿を読んで頂いた方から受け取った感想の一部を紹介する。

そして第五章では、ホームページで「原則」の結論部として提示していた内容を紹介する。

また、本書の最後に付録として、2ちゃんねるでの雰囲気伝えるため、私が書いた一

部の書き込みを取り上げ、ダイジェストとして紹介する。

これまでにネット上で蓄積されてきた情報は膨大な量であるため、その全てを一冊の本に詰め込もうとはしていない。本書はそれらを簡潔にまとめたものとなっている。

ホームページでは、「原則」について別のまとめ方をしていたり、過去に掲示板でやりとりされていた全てのログや、本書では紹介しきれない参考文献なども紹介している。興味を持った方は、[gensoku.net](http://gensoku.net) までアクセスして頂ければ幸いである（ウェブブラウザのアドレスバーに『[gensoku.net](http://gensoku.net)』と入れることで、すぐにアクセスできる）。

#### ・これまでの経緯

今からおよそ8年前、**2003**年の**2**月からネット上にて「原則」を提唱し始めていたが、なぜ今頃になって原則プロジェクトを開始することになったのか、その理由を記したい。

「原則」を提唱してから半年ほどで、その趣旨を理解する人間が現れたことは確かである。この時、私は他の誰か一人に対してその意図を伝えることに成功した。そして、その後は「原則」を理解する者が少数ながら現れることになった。一部の人間の間で「原則」を共有することに成功したと言って良いだろう。しかし、当時は『「原則」を知りたいけど自分には分からない』という趣旨の書き込みも少なくはなかったのである。

最初にスレッドを立てたのが今から8年前であり、今頃になって原則プロジェクトを提唱し、最初の活動として本を出版しようと動き始めた理由はそこにある。実は、この「原則」の存在を第三者の人間から理解して頂くということが想像以上に大変なことであったのである。

確かに、初めてその趣旨を他の一人の人間に伝えるまでも半年の時間はかかったが、今から考えれば、そのこと自体は簡単に成し遂げられた事実であったと言えるのだろう。もともと理解力のある人間によって理解されるということは、そう難しいことではなかったのである。彼については、掲示板で一度のやりとりをただけで、すぐにその趣旨を理解したのである。つまりは、彼が原則スレに現れるまでに半年の時間が必要になっただけなのである。それに比べ、『誰もが「原則」に向かって進んで行くことで、その趣旨について理解していけるものである』という結論が出せるまでには長い時間が必要になった。

結局は**2009**年の**3**月になって、『「原則」を知りたいけど自分には分からない』と主張する人間はようやく絶滅したのである。それまでに私は概算で**1500**レス以上、分量にして**50**万字以上の内容を掲示板に書き込みしていたとともに、理解に役立たせて頂きたいと考えてまとめ始めた「原則」についての原稿（原稿用紙にして**700**枚程度の分量）をネット上に公開することになった。原稿の内容については、読者モニターという形で読者を募り、

反応を確かめながら必要なものをまとめていったのである。

それらの努力もあるが、理解を目指して着実に歩みを進めてこられた方の努力とも相（あい）まって、ようやく『「原則」が分からない』と言い続けてきたその彼も、「原則」という言葉で示されている趣旨を完全に理解することができるに至ったのである。彼が『「原則」が分からない』と主張する人間の最後の生き残りとなったのである。「原則」の理解までに5年と4ヶ月がかかったとのことであった。

現在に至っては、理解者の間では「原則」を理解すること自体は簡単なことであるという共通認識を持っている。長い年月が必要であったのは、「原則」に関する謎を解明し、明らかとなった情報をまとめていくためであった。その謎が完全に解き明かされた今となつては、容易にその全貌を理解することができるものとなっている。

ようやく「原則」の謎が完全に解き明かされたことから、我々はその趣旨を世界中の人々へと伝えていくためのプロジェクトを開始していこうと動き始めたというわけである。そのプロジェクトとして初めの動きが本書の出版になっているのであり、我々原則プロジェクトの存在を世間から認知して頂くことを目的として、今ここに出版が果たされたのである。究極的には、人類の平和と発展のために貢献していくことを目的に設立されたプロジェクトであり、人類の一人一人が、より幸福な人生に繋がっていくことを目指して我々は前進し続けていくつもりである。

#### ・今後の展望

今のところ、我々は人類のごく一部にしか過ぎない存在であるが、我々の動きによって人類に広く「原則」が普及していき、将来的にはあらゆる世界が「原則」によって繋がり、人類全体が「原則」によって動いていくように促していこうとしている。

つまり、将来的には『我々』という言葉で人類全体を指すことができるように「原則」の輪を広げていくことが、我々の社会的使命である。この使命は、原則プロジェクトが持っているDNAと考えて頂ければ分かりやすいだろう。最終的には全ての人間によって原則プロジェクトが促され、それによって理想の人間社会が実現されることをプロジェクトは目指しているのである。

念のために繰り返すが、原則プロジェクトを促していくのは人類を構成する全ての人間一人一人である。全ての人間の一人一人が釣り合いの取れた力を持つことで、自然とバランスの取れた人間社会が営まれてくるようになってくる。決して一部の人間達が巨大な権力を持って人類を支配していくという意味ではない。一人一人の集まりである人類は、総体として「原則」という一つの意思を持ち、人類自らが人間社会を的確にコントロールしていけるようになるという構想である。一人一人の思いが、そのまま人間社会の動きとし

て反映されていく社会になっていく。「原則」が広く普及・浸透していくことで、自然とそのような動きが形成されてくるものと考えられる。

これらの動きを客観的に眺めるのならば、人類の中の一部から「原則」が自然発生し、次第に「原則」は広まり、人類全体に影響を与えていくかのように見えるだろう。人類にとって「原則」は一つのきっかけにしか過ぎないが、これから「原則」によって人間社会は本来あるべき理想の姿に変わっていくものと考えられる。

そのような現象を、我々は『「原則」による人間社会の自己組織化』と呼んでいる。もともと、そのような構想が実現されていくためには数十年から数百年という時間がかかるものと思われる。

人類は農業革命、産業革命、情報革命とその歴史を歩んできたが、「原則」が普及・浸透していくことで、人類にとって最後の革命が始まっていくことになる。その革命は、「原則」によって一人一人の考え方、ひいては人類の考え方に変化が起こることによって始まる革命となる。そして、それに伴って様々なシステムも変わっていくことになる。既存のシステムに満足せず、「原則」に則った理想的なシステムに作り変えていこうとする人類の動機によって変革は進められていく。一極に集中していた権力は、次第に一人一人の元へと還元されてくる。「原則」によって生み出される流れによって、人間社会は大きく変わっていくことになるものと予想される。

原則プロジェクトは、数百年、数千年の先を見越し、世界の原則化を促進させ、理想の世界を実現させていくために存在しているのである。全ては世界の原理である「原則」という方針に従って、全世界へと活動の範囲を広げていくプロジェクトなのである。

#### ・個人的な思惑

世の中から見れば、私の見いだした「原則」はちょっとした閃きだったと言っても過言ではないだろう。しかし、私自身にとっては、スレッド名にした通り『人生最大の発見』であったことは間違いない。実際にあらゆる物事の方法論を「原則」によって導いていくことができるのである。

私は「原則」の典型的であり単純な性質を掴むことができたのである。この性質を掴めれば、後は実際に「原則」を物事に当てはめて応用していけば良いのである。

「原則」を用いることで、実際にあらゆる物事を上手くこなせることが分かってしまった私は、自分の中だけにその方法論を留めておくのはもったいないと考え、2ちゃんねるでその存在を説き始めたのである。

その後、「原則」の存在を他者に伝えることは成功したが、それ以上に広まっていく様子

は全く伺えなかった。当初の思惑として、「原則」はロコミなどで自然に広まっていくものと思っていたが、現実はそのようにならなかった。確かに長い年月があればロコミでもそれなりに広まっていくのかもしれないが、やはり「原則」を主体的に広めていく組織があって然るべきだと考えるようになってきたのである。

というのも、今の世界情勢、そして日本国内の様子を眺めていても、明るい未来があるようには思えない。人口の増加によって、人類はその生活水準を半永久的に維持していくことはできるのだろうか。各々の人間は、自国の利益、自社の利益、自分の利益については真剣に考えて行動しているのであろうが、人類という観点から数十年、もしくは数百年後の世界を見据えて行動している人間はどれだけいるのであろうか。

地球温暖化の問題にしても深刻である。地球規模の環境問題を放っておけば、時間が経てば経つほどに取り返しが付かないことになる。これから解決していかなければならない社会的な問題は他にも山ほど存在しているのである。

人類の一人一人が己の利益のみを考え行動しているのであれば、人類には暗い未来が待っている。しかし、人類の一人一人が人類自身のため、つまりは『みんながみんなのために』行動していくことになれば、それが人類にとって明るい未来に繋がっていくことは明白なことであろう。

だが、現状では社会的な問題を解決していくことが重要であるという認識が、世間の人々からは全くなされていない。確かに、最近では日本においても社会起業家と言われる人達が注目されつつもあるが、未だ世間的な知名度は低いと言わざるを得ない。社会的な問題を解決しようと考え行動している人達をみんなで応援してあげられる社会にはならないのだろうかと思っている次第である。

これらのように、理想の社会にはほど遠い今の世界をこのまま黙って眺めているわけにはいかなかったというのが本音である。すでに「原則」というツールが広く知られているのであれば私の出る幕はないが、それが広く知られていないために、なかなか理想の世界に向かって進まない地球上の人類の未来に危機感を持ち始めたのである。

少なくとも、原則プロジェクトがそのようなメッセージを世界中の人々に飛ばし始めることができたなら、世界中の人々一人一人の意識、つまりは人類全体としての意識も少しずつ変わっていくのではないかと考えているのである。人種や国、年齢や性別が異なれば、持っている考え方はそれぞれ異なるのであろうが、宇宙からの視点で考え、同じ地球人として地球を共有し、将来の人類のためにと考えるのであれば、人類の平和と発展、そして持続可能な社会の実現という同一の目標を共有できるのではないかと思うのである。

原則プロジェクトの社会的な役割は、『我々人類は、みんなで理想の世界の実現を目指していくべきである』という趣旨のメッセージを人類全体に対して飛ばしていくことである。また、『みんなでみんなが幸せな世界を作っていくこと』、そのようなスローガンを人類全体で共有するべく働きかけていくことである。

当初はネット上にて「原則」を伝えられた時点で、それで私の仕事は終わったのではないかと喜んでいてもいたが、どうやらそれはとんでもない間違いであったようである。むしろそこから本当のスタートとなったのである。

確かに、私個人として「原則」の存在を確立させるという仕事は終わったとも言えるのだが、今の私は、原則プロジェクトを構成している一員として、プロジェクトとしての目的を達成させるために従事し始めたのである。それは、単に「原則」という物事の方法論を広く伝えていくだけではなく、実際に自らが社会に名乗り出て、世の中が変わっていくためのきっかけを作り始めていくということである。

正直、大々的に大風呂敷を広げて世の中に訴えかけていくというのは、個人的には気の進まないところもある。しかし、そのように大々的にやっていかなければ世間からの注目を集めていくことは到底不可能であり、「原則」を表現していくためにも必要になってくることである。原則プロジェクトは「原則」の意思を忠実に人間社会の中で具現化していく方針であり、私はその方針に従って、淡々とプロジェクトの進行を促していきたいと考えている。

私が「原則」を見いだしたのは**2001年4月**のことであるが、当時は「原則」を提唱するだけして、後は勝手にそれが広まってくれば小気味よかったと思っていた次第である。偉大な物事の発見者は無名のままである。

だが、何もしなければ「原則」という物事の方法論が広まっていく様子は伺えず、地球環境の悪化も止まることなく進んでいるように見える現状に至っては、原則プロジェクトを推進していくことによって理想の世界を目指していくことが避けられないと感じたのである。冗談めかして言えば、それが人類に先駆けて「原則」を発見してしまった人間の使命なのかもしれない。「原則」を発見してしまった私は、「原則」に従って原則プロジェクトを推進させていくことを決意したのである。

また、実のところ、すでに原則プロジェクトの成り行きを楽しみに見守ってくれている人も少なくないのである。原則プロジェクトが前に進んでいくことで、関わってくれる人達にも何らかのメリットを提供していければ良いと考えている次第である。前代未聞であり人類史上最大のプロジェクト、それが「原則」の意思の通りに実現されていくのかどうかはこれからの楽しみである。

最終的には、世の中の全ての人達を巻き込む形になるようプロジェクトを進めていきたいと考えている。いや、誰もがプロジェクトの今後の成り行きを見守っていききたい、間接的にでも関わっていききたいと思えるようなものになるよう進めていきたい次第である。常識から考えれば途方もない目標であるが、「原則」に従って進んで行くことによって、それらは自ずと現実化していくのではないかと考えている。

## 第二章 人類史における重大な事実

- ・「原則」は再発見されたという事実

本章には『人類史における重大な事実』という大層な題を付けることにしたが、「原則」を知るにあたり、決して見逃せない事実をここで伝えることにしたい。

実のところ、我々が唱えている「原則」なる概念を、すでに歴史上において唱えていた人物が存在していたのである。その人物こそ、かの有名な老子である。

老子は紀元前に生まれた中国の古典として広く知られているが、その詳しい人物像は明らかにされていない。現在『老子道德経』として伝えられている八十一章からなる書は、紀元前4世紀の頃にはすでに存在していたようである。老子は「道（中国語の発音から"タオ"と呼ばれている）」なる概念を唱え、その「道」なるもので世界を語った。書にはその内容が書き記されているのである。

そして、この老子の唱えている「道」なるものが、我々の唱えている「原則」と全く同一のものである。

実は、老子が「道」を説いていたという事実を知ったとき、我々の多くはその事実に驚かされた。私を含め、多くの人が老子の存在を知ってはいたが、老子が「道」なるものを説いていたことまで知っていた人間はほとんどいなかったようである。

私が掲示板にスレッドを立て「原則」を説き始めたのが2003年の2月であり、初めて老子の「道」について言及したレスが登場したのは同じ年の6月である。それまで私は老子が「道」を説いていたことを知らず、独自に「原則」について説いていた。そして、その内容を見ていた人のうちの誰かから、『「原則」とは老子の言う「道」のようなものなんですか?』といったレスが付けられたのが初めであった。

その後は、「原則」を理解している人間の間で『「原則」 = 「道』』という共通認識が生まれるようになった。「原則」を理解している人間であれば、「道」の記述を読むことで、すぐに同じものであると理解できる。また、「原則」についての深い理解があれば、老子の書を読んで、それらの記述はまさしく「原則」によって生まれたものだとして理解することができる。数千年の時を超えて、同じものを共有することができるという事実に感動すら覚えるのである。

- ・老子は「道」の存在を提唱していたという事実

ここで、老子が提唱していた「道」について紹介することにしたい。老子の書の中でも

「道」そのものについて言及されている部分は少ないのだが、最も重要な部分である第一章について取り上げてみることにする。

まずは原文と共に、訳が分かりやすいと思われる守屋洋氏による日本語訳を、書籍『「老子」の人間学—上善は水の如し』より紹介する。

「

道可道也、非恒道也。名可名也、非恒名也。無名万物之始也、有名万物之母也。

故恒無欲也、以觀其妙、恒有欲也、以觀其所噉。兩者同出、異名同謂。玄之又玄、衆妙之門。

これが「道(みち)」だと説明できるような道は、ほんものの道ではない。

これが名だと呼べるような名は、ほんものの名ではない。

「道」にはもともと名はないが、これこそ万物の根源であり、そこから天地が生じ、万物が生まれた。

万物の実体を見極めるには、常に無欲でなければならない。欲望にとらわれていると、現象しか見ることができない。

ただし、実体も現象もともに「道」という根源から生じており、名を異にしているにすぎない。

「道」はあくまでも霊妙(れいみょう)な存在であり、そこから森羅万象(しんらばんしょう)が発するのである。

」

簡単にまとめると、「道」とは万物の根源であり、そこから全てが生まれるということである。言い換えれば、万物には根源があり、その根源こそが「道」という主張である。

また、「道」を見極めるためには無欲でなければならないと書かれているように、そう簡単には見極めることができないものだということである。

これ以降の章について、「道」そのものへの言及は極めて少ないのだが、この第一章の内容だけでも「道」の意味するものの理解には十分であろう。つまり、「道」とは万物を生み出している根源である、ということである。

ここまで老子と「道」についての簡単な説明をしてきたが、書籍『「老子」の人間学』のまえがきに程よくまとめられているので、参考までに紹介することにしたい。

「

いま、なぜ『老子』なのか。

『老子』という古典は、全部で五千字あまり、八十一の短い文章から成っている。だれが書いたのかはわからない。いまから二千数百年まえ、百年ほどの時間をかけながら、

思想を同じくする複数の人々の手が加わってできあがったものであろうといわれている。

その内容は、したたかな処世の知恵を説いているのだが、たんにそれだけではなく、哲学、政治、兵法、策略など、論及している問題は多岐にわたっている。

特徴的なことは、万物の根源に「道」なる存在を認め、そこから論を展開していることである。

『老子』によると、「道」とは万物を成り立たせている根源の存在であるが、それほど大きい働きをしておりながら、自分はというと、いつもしんと静まりかえっている。

目で見ることもしないし、耳で聞くこともできない。

「無」としか言いようのないものだが、たしかに存在しているのだという。(中略)

この古典には、しぶとい雑草の精神、したたかな生き方が示されている。

現代の私どもも、そんな生き方を『老子』に学ぶ必要があるのではないか、いや、ぜひ学んでみたい、そういう願いを込めて本書をまとめてみたのである。

」

以上で老子に関する概要はおおよそ伝えられたものと思うが、ここで、我々のスタンスと老子のスタンスを比較してみたい。『「原則」＝「道」』ということには間違いないが、そのスタンスについては同じということではない。

我々を取り巻いているこの世界について、我々現代人は過去の時代を生きていた老子よりも遥かに多様で多くの知識を持っている。そのため「原則」の性質についてより深く理解し、老子よりも「原則」、すなわち「道」のことを的確に捉えることができているのである。

確かに老子は「道」の存在を指摘しているが、その存在そのものの性質までを完全に明らかにしてはいない。よって、完全にその性質までを明らかにすることのできた我々とはスタンスが異なっていて当然なのである。

しかし、「道」の存在、つまりは「原則」の存在を指摘していた人間が過去に存在していたという事実は、歴史的に重大な事実であると言えるだろう。現在を生きている我々と同じように、「原則」という思考の元になるものを用いて思考をしている人間が過去にも存在していたということであり、「原則」を用いた考え方は、時空を超えて普遍的なものであることが示されているということである。

老子が「道」を唱えていたという事実については、これから「原則」が世界に広く普及・浸透していくことで、世界の常識として定着された事実となっていくことだろう。

### 第三章 現代社会に根付いている「原理原則」

#### ・「原則」と同義の概念を提唱している人物

実のところ、我々が提唱している「原則」と全く同じ概念であるものを提唱している人物が現代社会に、しかも日本にいたので触れておきたい。もともと私も名前を知っていた人であったが、その人物とは船井総研（船井総合研究所：東証一部上場のコンサルティング会社）の創業者である船井幸雄氏である。

実は老子と同様、船井氏についても、『「原則」と同じことを主張しているのではないか？』といったレスが掲示板に付いたことから、船井氏が同じ趣旨を述べていたことを私も知ったのである。その主張について、著書『図解 即時業績向上法—「つき」を呼ぶ船井流原則経営のすすめ』から紹介したい。

「

どうしてそれだけ伸びることができたのか。もちろん私の会社だけではない。クライアントの会社の成功例などを含めて考えてみると、そこにひとつの大きな理由があることが、私にやっとわかってきた。それは、どうやら天地自然の理に合っていたからだ、ということなのである。

世の中には、世の中をつくり、動かしている大きな原理・原則がある。

この原理・原則こそが、天地自然の理だということをわれわれは知っている。

この世の中は、おそらく単純な原理・原則によってでき上がり、運営されているのだろう。

だが、われわれは天地自然の理のほんの一端しか知らない。

いろいろなことを知っているようでいて、実は世の存在の原理、運営の原則の何万分の一も知らないのではなからうか。

しかし、知らなくても世の中は確実に動いている。その動きのなかに原理・原則がある。

この原理・原則に合ったことを実行していれば、どうやら「つき」がめぐってきて成功

するが、

それに反することをやっていけば、「つき」は逃げ、売り上げも利益も下がっていかざるをえない。

」

ここに「原理・原則」という言葉が何度か出てきているが、実は、この「原理・原則」という概念が「原則」と同じ概念のものであり、世の中を動かしている大本（物事の根本原理）であると言える。

また、『この原理・原則こそが、天地自然の理だ』という言葉が述べられているが、「天地自然の理」という言葉を使っている人物をもう一人紹介することにしたい。実は、その人物は誰もが知っている著名人であり、経営の神様とも言われている松下幸之助氏である。

パナソニックを一代で築き上げた松下氏の経営哲学が端的に示されているものを、著書『実践経営哲学』から紹介してみよう。

「

経営というものはまことにむずかしい。

いろいろな問題がつきからつきへと起こってきて、それに的確に対処していかなくてはならない。

考えるべきこと、なすべきことがいろいろあり、それを過たないということは、確かに容易なことではない。

しかしまた、考えようによっては、経営はきわめてやさしいともいえる。

というのは、それは本来成功するようにできていると考えられるからである。

私は自分の経営の秘訣というようなことについて質問を受けることがあるが、そういうときに

「別にこれといったものはないが、強いていえば、"天地自然の理法"に従って仕事をしていることだ」

という意味のことを答える場合がある。（中略）

私のいう、"天地自然の理に従った経営"というのは、当然なすべきことをなすということである。

それに尽きるといってもいいかもしれない。

その、なすべきことをキチンとなしていれば、経営というものは必ずうまくいくものである。

その意味では、経営はきわめて簡単なのである。（中略）

私自身についていえば、そういう点で、なすべきことをなし、  
なすべからざることをしないようにということを心がけて、ずっと仕事をしてきた。  
時として判断を誤って、なすべきことをしなかったり、なすべきでないことをしたりした  
こともあった。

しかし、心がまえとしては、なすべきをなし、なすべからざることをしないということ  
に極力、努めてきたつもりである。

限りなき生成発展というのが、この大自然の理法なのである。

だから、それに従った生き方というのは、おのずと生成発展の道だといえよう。

それを人間の小さな知恵、才覚だけで考えてやったのでは、かえって自然の理にもとり、  
失敗してしまう。

大いに知恵を働かせ、才覚を生かすことも一面きわめて大切であるが、

やはり根本は人知を超えた大きな天地自然の理に従って経営をしていくということであ  
る。なくてはならないのである。

」

ここで紹介した両者の考え方には共通しているものがある。もちろん、それは「天地自  
然の理」を前提とした考え方である。簡単にまとめると次の様になる。

(船井氏)「天地自然の理」に合ったことを実行していれば「つき」がめぐってきて成功  
する

(松下氏)「天地自然の理」に従って経営をしていくということであらなくてはならない

つまり、世の中には自然界の法則（「原理・原則」、「天地自然の理」といった言葉で示さ  
れているもの）があり、成功するためには、自然界の法則に則って成功するための道筋を  
進んで行かなければならないということである。

この「天地自然の理」、つまりは「原則」による考え方であるが、経営の分野に限らず、  
あらゆる物事の中で活用していくことが可能である。本章では、同じような考え方を元  
にすることで成功してきた人達を取り上げていく。

・「原理原則」に則った考え方

世の中では、「天地自然の理」と同じような意味合いで、「原理原則」という言葉が用いられることが多々ある。両者は同じような概念であるが、広く物事を見据えている場面では「天地自然の理」という言葉を用い、ある物事に直面した場面が想定されている中では「原理原則」という言葉が用いられている傾向がある。特に、自然界の側が意識されている場合には「天地自然の理」を用い、その自然界に立ち向かっている人間の側が主体となっている場合には「原理原則」を用いることが多い。

前置きが長くなったが、ここで「原理原則」の代名詞と言える人物を紹介したい。その人物とは、京セラグループの生みの親、稲盛和夫氏である。稲盛氏は全国各地に盛和塾を開き、広く経営者の人々に自身が確立してきた人生や経営における哲学を伝えている。また、松下氏と同様に経営の神様とも言われている人物でもある。

その稲盛氏が最も重要としている哲学が、『常に「原理原則」を基準として判断する』ということである。稲盛氏の著書『心を高める、経営を伸ばす―素晴らしい人生をおくるために』からその主張を紹介しよう。

「

常に、原理原則を基準として判断し、行動しなければなりません。

とかく陥りがちな、常識とか慣例などを例に引いた判断行動があってはなりません。

常識や経験だけでは、新しいことに遭遇した場合、どうしても解決がつかず、そのたびにうろたえることになるからです。

かねてから原理原則に基づいた判断をしていれば、どんな局面でも迷うことはありません。

原理原則に基づくということは、人間社会の道徳、倫理といわれるものを基準として、人として正しいことを正しいままに貫いていこうということです。

人としての道理に基づいた判断であれば、時間、空間を超えて、どんな環境でも通じていくものです。

そのため、このような判断基準を常に持っている人は、未知の世界に飛び込んでも、決してうろたえたりはしないのです。

新しい分野を切り開き、発展していくのは、豊富な経験を持っているからではありません。

常識を備えているからでもありません。人間としての本質を見すえ、原理原則に基づいた判断をしているからです。

」

稲盛氏は 27 歳で初めて会社経営に携わって以来、常に「原理原則」に則って物事の本質を追究し、人間として何が正しいかで判断をしてきたということである。着実に会社を経営し続けることのできた稲盛氏が最も重要としている哲学こそ、「原理原則」にさかのぼって徹底して考えていくということなのである。

・経営には「原理原則」がある

経営の分野で「原理原則」の存在を指摘している人物は少なくないが、ここではもう一人、会社経営には「原理原則」が不可欠だと主張している人物を紹介することにしたい。その人物とは、ジョンソン・エンド・ジョンソンや日本フィリップスなど、数々の外資系企業の経営職を歴任してきたプロの経営者、新将命氏である。新氏は、経営とリーダーシップに関する講演やセミナー、執筆などを通じてリーダーの育成に取り組まれている。

世の中には流行してきた数々の経営手法があるが、新氏はどのような経営手法よりも、「原理原則」の重要性を説かれている。また、近年には経営に関する「原理原則」をまとめたものとして、『経営の教科書—社長が押さえておくべき 30 の基礎科目』という著書が出版されている。冒頭部から、その趣旨について述べられている箇所を紹介する。

「

私はこれまでに社長職を三社、副社長職を一社経験し、現在ではさまざまな会社のアドバイザーを努める立場にある。

これはひとえに長年にわたり経営にたずさわってきた経験のおかげだが、いまでは企業トップに 10 分ほど話を聞き、

社内をざっと拝見すれば、

「この会社は伸びる」「ちょっと危ない」「かなり危ない」といったことがだいたい読めるようになった。

なぜか。それは、業種業界に関係なく、企業経営の根幹の 80 パーセントは、ほとんどの会社も同じだからだ。

残る 20 パーセントは、変動要素である商品や流通や商習慣の違いであり、

これは半年から 1 年も勉強すれば習得できる類のものである。

だからこそ、180 度違う異業種からの社長就任も、まったく問題はないのである。

重要なのは「不易」である根幹の 80 パーセント、すなわち「経営の原理原則」を身につけることなのだ。(中略)

本書は、半世紀近くに及ぶ私自身のビジネス経験から導き出した「経営の原理原則」をコンパクトに集約したものである。

7つの章にまたがってお伝えする30の項目はみな、組織を率いる者であればだれしも肝に銘じておかなければならないものばかりである。一見しただけでは、「なんだそんな当たり前のこと」

「それならもう何度も聞かされてきたことだ」と感じる向きもあるかもしれない。

しかし、である。会社をつぶす社長には、実はこの「経営の原理原則」を押さえていない、という共通的な特徴があるのだ。

逆に、うまくやっている会社の社長は、たとえ経営環境が厳しい折でも、いや、厳しい折だからこそ、

こうした経営の原理原則を忘れることは決してない。

きわめて厳しい状況に追い込まれ、どこから立て直すか、とためいきが出ている。

売上げや利益が伸び悩み、「何がいけないのか」「どうすればよいのか」と考えをめぐらせている。

ときに不安や恐怖に押しつぶされそうになる自分を律し、我が社を勝ち組企業に成長させたいと強く願っている一。

そんなさまざまな思い、前向きな問題意識や危機感を強く持っている経営者のあなたに、本書がなんらかのお役に立てるものと確信している。

」

ここで述べられている「経営の原理原則」とは何か、それは会社が発展していくためには従っていかなければならない原理なのである。

例えば、松下幸之助氏の有名な言葉がある。

「

成功している会社はなぜ成功しているか。成功するようにやっているからだ。

失敗する会社はなぜ失敗しているのか。失敗するようにやっているからだ。

」

松下氏は会社の経営状態を見ることで、新氏と同様に、その会社が「経営の原理原則」に則しているかどうかを判断していたということである。つまり、「経営の原理原則」に従っている会社は成功し、それに則していない会社は成功しないということである。また、松下氏の言葉を使って言い換えれば、「天地自然の理」に従って経営をしている会社は成功し、「天地自然の理」に従わずに経営をしている会社は失敗するということである。

ところで、「原理原則」は会社のみならず、あらゆる組織についても当てはまる。あらゆる物事には「原理原則」、すなわち「原則」（呼びやすいので自然に「原則」と呼ぶようになった）があるのである。この世の中は、「原則」に従っていくことで上手くいくような仕組みになっていたのである。

- ・すでに世界中で普及し始めている「原則」

私が掲示板に書き込みをし始めたのが**2003年2月9日**であるが、その間もない頃から参考書籍として挙げていた一つの書籍をここで紹介したい。

世の中ではベストセラーになっていることから、すでに知っている方は多いと思われるが、その書籍とは「**7つの習慣—成功には原則があった!**」である。**38ヶ**国語に翻訳され、全世界で**2000万部**、日本では**130万部**を売り上げている書籍であり、たいていの本屋や図書館で置かれている現状がある。著者のスティーブン・R・コヴィー氏は、世界で最も大きな影響力を持つビジネス思想家と評価されている経営コンサルタントであるが、ベストセラー作家でもあることから、電子書籍化の波の中で、著書のデジタル出版権を大手出版社からアマゾンのキンドルストアに移したことが話題になっていたのは記憶に新しい。

また、余談であるが、**2010年**の**7月**にコヴィー氏は歌手の郷ひろみ氏と東京にて対談をしていたようである。書籍「7つの習慣」を持ってほほえむ郷氏の様子が印象的に写っている (<http://www.effectiveness.jp/talk/special-20100728.html>)。

ところで、書籍「7つの習慣」が生まれた背景を先に伝えておこう。まずは書籍の導入部から、それが分かる部分を紹介したい。

「

私はもうひとつ別の研究に取り組んでいた。

それは、一七七六年、アメリカ合衆国の建国以来、

アメリカで出版された「成功」に関する文献をすべて徹底的に調査するという研究であった。

つまり、自己改善や一般向けの心理学、あるいは自助努力などの分野で、

何百冊という本・記事・論文などに目を通し、その中身を調べるというものであった。

アメリカという自由かつ民主的な国家に生きる人々が考える「成功の鍵」のすべてが私の手元にあった。

「成功」についての書物を二百年分さかのぼってみると、その中に驚くべき傾向が隠されていることが分かった。

最近の五十年間の成功に関する文献の内容は、  
自分自身の抱えていた問題や仕事で接してきた人たちの心の痛みを考えると、  
それはその場しのぎの表面的で薄っぺらなものにすぎないということだった。  
これらの文献は成功するためのイメージのつくり方、  
テクニック、あるいは応急処置的な手法を説明しているだけだったのである。  
鎮静剤やバンドエイドのように上辺の症状に対応し、その問題を解決しているかのよう  
に見えるが、  
それは一時的なものにすぎず、その問題のもとにある慢性的な原因には全く触れていな  
い。  
そのため、その問題が何度も再発することになるのだ。  
こうしたアプローチを「個性主義」と呼ぶことにした。

その一方、はじめの百五十年間の文献はそれとは著しく対照的なものであり、「人格主義」  
と呼べるものであった。  
これらの文献には、誠意、謙虚、誠実、勇気、正義、忍耐、勤勉、節制、  
黄金律などが成功の条件として取り上げられていた。  
なかでもベンジャミン・フランクリンの自叙伝は代表的なものであり、  
ひとりの人間がいくつかの原理原則を自分自身の人格に深く内面化させようとする努力  
の物語であった。

この人格主義では、「成功」といわれるような人生には、  
その裏付けとなる原理原則（以下、「原則」と呼ぶ）があり、その原則を体得し人格に取り  
入れる以外に、  
人が真の成功を達成し、永続的な幸福を手に入れる方法はないと教えている。  
」

まとめてみると、コヴィー氏は「成功」に関する文献を徹底的に調査していた。その中  
で判明した事実とは、過去におけるアメリカの人々の「成功」に対する考え方は、「原理原  
則」を体得し人格に取り入れる以外に、人が真の成功を達成し、永続的な幸福を手に入れ  
る方法はないというものであり、ここ最近の個性主義のアプローチでは問題を根本から解  
決することができないというものであった。

また、著書の中でコヴィー氏は「原則は自明的な自然の法則といえます」と述べている  
が、「原則」に対する見解が分かる部分を続けて紹介する。

「

歴史から学べる最も大切な教訓のひとつ、個人にしても、組織にしても、また文明その

ものにしても、

「効果性」を司る不変の原則または自然の法則と調和した行動をとるとき、必ず長期において繁栄しているということです。

私は常にこれらの原理・原則の普遍性に驚嘆し、かつ謙虚な気持ちを感じずにはられません。

真の原則は、伝統、社会、宗教、文化または国民性などの障壁をすべて超越するものです。

本書が説明している「7つの習慣」はこれらの普遍的な原則に基づくものなのです。

」

コヴィー氏も、船井氏と同じようなことを述べていることに気がつくだろう。

(コヴィー氏) 不変の原則または自然の法則と調和した行動をとるとき、必ず長期において繁栄している

(船井氏) 「天地自然の理」に合ったことを実行していれば「つき」がめぐってきて成功する

結論として、コヴィー氏は「原則」による考え方を、過去における「成功」に関する文献の調査から理解していたのであり、経営コンサルタントとして様々な経験をしたり、自分の人生を深く見つめていく中で、自身で身をもって「原則」の力を知ることになったのである。

書籍「7つの習慣」とは、「原則」に基づいて充実した人生を過ごすために必要な事柄がまとめられたものなのである。その書籍自体が今でもロングセラーを続けているが、関連書籍も数多く出版されている。これらによって、世界中に「原則」による考え方が広く伝搬していったものと思われる。

・「原則」による考え方は自然と身に付いていく

本章では「原理原則」を説かれている数名の人達を紹介してきたが、「原則」という言葉でどういったことを指しているのかが少しは見えてきたのではないだろうか。

ここで問題になるのは、例えば松下幸之助氏の言葉を借りれば、「天地自然の理」に従って経営をしていくべきであるということだが、では、どのような経営が「天地自然の理」に従った経営になるのか、ということである。

実のところ、「原則」という概念を理解し、それを前提とした考え方をしていると、いつ

の間にかに「原則」による考え方が自ずと身に付いてくるようになることが今回判明したのである。すなわち、「原則」は誰もが自ずと身に付けていけるものであったのである。

人は無知の状態で生まれてくるが、あらゆる分野において、人は学習していくことで、何が「原則」に則しているのか（原則的なのか）が分かるようになってくるのである。つまり、この世の中のあらゆる物事には因果関係があり、人は学習していくことで、それらの因果をあるがままに捉えられるようになっていくのである。そして、物事を支配している因果を捉えることで、初めてその因果の範囲内において自在に物事をコントロールすることができるようになるのである。

「原則」を用いた考え方・思考というのは極めて単純なものである。その単純な考え方が掴めれば、あとはその考え方をあらゆる物事に応用できるようになっていく。一方で、「原則」を用いた思考は最も高度な抽象思考でもある。習得するためには、それなりの鍛錬が必要になってくることは言うまでもないだろう。

なお、「原則」を捉えるまでに理解が進まなくても、人は「原則」を指針として思考・行動することができる。「原則」は考え方の元になるものとして誰もが有効に活用することができ、視野を広げていくことによって、様々な分野における「原則」の効用を知ることができるのである。

本章で紹介してきた人達の他に、世の中には様々な分野で「原理原則」の重要性を説いている人達がいる。本質的には同じことが述べられているのでここでは省くが、ホームページ (<http://www.gensoku.net/>) では参考文献として紹介しているので、興味があったらアクセスして頂ければ幸いである。

第四章へ続く